

第三章 資本主義的蓄積の一般法則 (その一)

第一節 資本の構成が不変な場合における、蓄積にともなう労働力需要の増大

「資本の構成」—— 価値構成、技術的構成、有機的構成
マルクスは、章の冒頭、「本章では、資本の増大が労働者階級の運命におよぼす影響を取り扱ふ」(資本論④一〇五三ページ、[I] 640ページ)と書きますが、労働者階級の運命を考察するために、蓄積の過程での資本主義的生産の動き方そのものが、より立ち入って研究されなければなりません。
そのために、ここでは、資本主義的生産の運動を考察するための新しい概念がまず提起されます。それは、「資本の構成」という概念です。

私たちは、資本は、不変資本(機械や原料などの生産手段)と可変資本(労働力)とからなっていることを、知っています。資本のこの二つの部分の組み合わせの関係を「資本の構成」と呼びます。これが、これからの研究に特別な意味をもつてくるのです。
「資本の構成」には、価値の面から見た構成(価値構成)と素材の面から見た構成(技術的構成)との二つの面があります。

「価値構成」とは、資本が生産手段の価値(不変資本)と労働力との価値(可変資本)とに、どう分割されているか、その量的比率で規定されます。資本が一〇〇〇で、不変資本に八〇〇、可変資本に二〇〇を投資したとすると、この資本の価値構成は四対一ということになります。

「技術的構成」は、素材の面から見て、「充用される生産手段の総量」と「その充用に必要な労働量」の比率で規定されます。「生産手段の総量」といっても、機械にも原料にもいろいろな種類がそれぞれの規模であり、その全体をいってわけですから、量的な表現はむずかしいのですが、価値構成と同じ資本でも、技術的な側面ではさまざまな内容をもつことが、当然あります。「有機的構成」というのは、この両者を総括した概念です。マルクスは、これを、「資本の技術的構成によって規定され技術的構成の変化を反映する限りでの資本の価値構成」(同前)と定義しています。これからの議論でも、資本の構成という場合には、普通はこの有機的構成のことです。代表的には、価値構成のc対vの比率で表されますが、その比率を、技術的構成を反映したものと読む、というつもりで読んでゆけばよいでしょう。

過程として見ると、その発展は、資本の構成の急激な高度化として浮かび上がってきます。マルクスは、そのことを、十八世紀から十九世紀にかけてのイギリスの紡績業の発展に即して、具体的な数字をあてて述べています。
「たとえば、一八世紀のはじめには、紡績業に投下された資本価値のうち1/2が不変部分で、1/2が可変部分であったのに、こんにちではその7/8が不変部分で、1/8が可変部分である」と(同前一〇七三ページ、[I] 651ページ)。

そうすると、資本の規模が同じ一〇〇だとしたら、十八世紀のはじめには、不変資本五〇、可変資本五〇だったのに、現在では、それが不変資本八七・五、可変資本一二・五に変わった、とらうことですか。つまり、資本の規模が四倍に増えてはじめて、以前と同じ数の労働者の雇用が確保できる、ということですか。

資本の構成がこのように高度化してゆくとともに、可変資本の減ってゆく割合より、もっと大きな勢いで生産規模が大きくなってゆかないと、労働者の数は減ってゆきます。だから、資本の蓄積といっても、資本の構成が変わらない時期はそれが労働者の数を増やすが、技術的な変革が進んで資本の構成が高度化する時期には、資本の規模が大きくなりながら、逆にいままでも就業していた労働者がはじき出されるという状況が進みます。

私たちは、この問題を、「相対的剰余価値の生産」では、機械化による労働者の分離ということと、個別的に見てきました。資本の蓄積過程を研究するこの章では、同じ問題を、社会全体の規模で考察します。

独自の資本主義的生産様式の成立と発展
第二節の後半で、マルクスは、機械制大工業の段階での社会的生産力の発展を、あらためてふりかえります。これは、ただ、第四篇で追跡したその発展を、資本の構成の変化という角度から見直した、というだけのものではありません。それが、いくつもの新しい視点を前面に押し出した総合的な考察となっていることを、読み取ることが大切ですよ。

第一点は、これが、「独自の資本主義的生産様式」の成立と発展という視点からの考察となっていることですよ。
「独自の資本主義的生産様式」の問題は、マルクスは「第四篇 相対的剰余価値の生産」の篇では問題にせず、はじめてこの概念を提出したのは、「第五篇 絶対的および相対的剰余価値」のなかででした(第七回講義)。しかし、そこでは、この概念のあらましの説明が主眼で、この概念を活用しての考察は本格的には展開されませんでした。

第二節後半での考察の新しい特徴は、機械制大工業の段階にまで到達した資本主義の発展を、「独自の資本主義的生産様式」の展開としてとらえ、一連の問題をその視点から整理している点にあります。
(一)(二)ここでは、協業から機械経営にいたる社会的生産力の発展の意義について、労働の分割

第二節 蓄積とそれにもなう集積との進行中における可変資本部分の相対的減少

らなかつた、ということも理解されることです。

資本構成の高度化は労働者をはじきだす

蓄積にともなう、資本の構成が高度化してくると、話が違ってきます。「資本主義制度の一般的基础がひとたび与えられれば、蓄積の経過中に、社会的労働の生産性の発展が蓄積のもっとも強力な積料となる時点が必ず現われてくる」(資本論④一〇七一ページ、[I] 650ページ)。
私たちは、「相対的剰余価値の生産」のところで、協業からマニファクチュア、さらに機械制大工業へと発展の歴史を追跡してきました。この過程を資本の構成という面から見ると、協業では、労働手段の特別の発展はありません。マニファクチュアでの労働手段は道具ですが、資本の構成に飛躍的な変化をひきおこすような要素にはならないでしょう。しかし、機械制大工業になると、機械はそれ自身が、それまでの道具にくらべてはるかに大きな価値をもった不変資本となり、しかも絶えず革新され巨大化してゆくのが特徴です。「相対的剰余価値の生産」の篇であり、その発展を、搾取関係や労働者の結合の問題といった角度から考察しましたが、資本の蓄積

および結合の組織 生産手段の大量の集積による節約 機械体系など 共同でしか充用できない労働諸手段の創造、膨大な自然力の活用、生産過程の科学的技術的応用への転化など、その歴史的進歩的な意義づけがまず展開されます。続いて、この発展は、商品生産の基礎では、自立した生産者の手によって是不可能で、資本家たちが生産手段をにぎるといふ形態のみ実現されたことが、指摘されます。
「商品生産という地盤は、資本主義的な形態でのみ、大規模な生産を担うことができる」(資本論④一〇七四ページ、[I] 652ページ)。

ここには、機械制大工業にいたる発展を、「独自の資本主義的生産様式」の発展と位置づける見方、より深い意味が示されているように、思います。この概念には、資本主義が労働と生産の方法までとらえたという意義と同時に、物質的生産力の高度な発展という資本主義の「歴史的使命」を体現した段階という意味もこめられているのです。

(一) いま引用した、大規模な生産は「資本主義的な形態でのみ」担うことができる、という文章に続けて、マルクスは「それゆえ」と言いながら、本源的蓄積について語ります。この考察の重要な特徴は、「本源的蓄積」を、資本主義一般の起点としてではなく、独自の資本主義的生産様式の起点としてとらえているところにあります。
「それゆえ、個々の商品生産者の手もにおけるある一定の資本蓄積が、独自の資本主義的生産様式の前提をなす。だからこそ、われわれは、手工業から資本主義的经营への移行にさい

し、このような蓄積を想定しなければならなかつたのである。このような蓄積は、本源的蓄積と名づける。なぜならそれは、独自の資本主義的生産の歴史の結果ではなくて、その歴史的基礎だからである」(同前一〇七四—一〇七五ページ、[I] 652ページ)。

(二) 独自の資本主義的生産様式の基礎の上では、労働の生産力を増加させるすべての方法が、剰余価値を増大させる方法であり、資本の加速度的な蓄積の方法です。そして、剰余価値の資本への継続的再転化は、資本の大きさを増大させ、生産の規模拡大、労働の生産力の増加、剰余価値の加速度的生産などの諸方法の基礎となります。こうして、独自の資本主義的生産様式と資本の蓄積は、相乘的に作用しながら急速な発展の道をたどります。

「ある一定程度の資本蓄積が独自の資本主義的生産様式の条件として現われるとすれば、逆作用としてこの生産様式が資本の蓄積の加速化を引き起こす。それゆえ、資本の蓄積にともなう独自の資本主義的生産様式が進展し、また独自の資本主義的生産様式にともなう資本の蓄積が進展する」(同前一〇七五—一〇七六ページ、[I] 653ページ)。

(四) この章での検討の中心問題である資本の構成の変化と可変資本部分の比重の縮小も、さきの引用に続く次の文章で、独自の資本主義的生産様式と資本の蓄積との相乘的な結果として説明されます。

「これらの両方の経済的要因は、それらが相互に与え合う刺激に復比例して資本の技術的構成における変動を生み出し、この変動によって、可変的構成部分が不変的構成部分に比べてま

生産が増えれば人手不足に悩まされる

「労働者不足」をなげた時代もあつた
資本の構成の概念をこうして明確にしたあと、第一節では、資本の構成が変わらないという条件のもとで、資本の蓄積が進み、資本主義が拡大再生産の道を歩むと、労働力の需給の関係はどうなるかの考察に移ります。構成が変わらないのですから、生産の規模が二倍になれば、不変資本も可変資本も二倍になり、生産の規模が三倍になれば、不変資本も可変資本も三倍になります。三倍になれば、三倍の数の労働者が必要になります。こういう時期には、労働力への需要が急激に拡大するわけで、資本家は、労働力不足と、その結果不可避的に起こる賃金の上昇に悩むのです。
こういうことは、現実のイギリス資本主義の歴史のなかで、「一五世紀中」および「一八世紀前半」に経験されたことでした。

「毎年、前年よりも多くの労働者が就業させられるのであるから、遅かれ早かれ、蓄積の欲求が労働の普通の供給を超えて増大しはじめる時点、したがって賃金上昇が起こる時点が到来せざるをえない。このことにかんする苦情の声が、イギリスでは一五世紀中および一八世紀前半を通じて鳴り響いている」(資本論④一〇五四—一〇五五ページ、[I] 641ページ)。

十五世紀といえは、マニファクチュアの発展に先行する時期、十八世紀前半といえは、機械制工業の成立に先行する時期で、こういう時期に、社会全体で見ても、資本の構成がほとんど変わ

B 人口論批判 ~ 人口増加が
貧困と貧乏の2つにない

大は「つねに激しい動揺および一時的な過剰人口の生産と結びついている」(同前二〇八四ページ、[I] 6599ページ)のです。

つまり、資本主義の生産は、高度成長のような発展期でも、あれこれの産業部門での技術的な変革が過剰になった労働者をはきだしながら進むもので、生産規模が広がり、資本の蓄積が加速されればされるほど、ますます多くの生産部門がこうした雇用の大変動にとらえられ、というのです。

資本主義的生産様式に特有の人口法則

マルクスは、このことを、次のような結論にまとめます。

「労働者人口は、それ自身によって生み出される資本の蓄積につれて、それ自身の相対的過剰化の手段をますます大規模に生み出す。これこそが、資本主義的生産様式に固有な人口法則である」(資本論④一〇八四ページ、[I] 6600ページ)。

マルクスが、ここで「資本主義的生産様式に固有な人口法則」を強調したのは、理由があります。当時マルジョア経済学者のなかには、人口が増えるのに生産が追いつかないから労働者が過剰になり貧乏が広がるのだといった「人口論」をとらえて、失業や貧困を人口の増加の罪にしようとする俗説がありました。マルクスは、資本主義的生産様式に固有な人口法則をここで示

大は「つねに激しい動揺および一時的な過剰人口の生産と結びついている」(同前二〇八四ページ、[I] 6599ページ)のです。

7

資本家 → 子にものを分け

マルクスは、資本の集中にかかわる諸法則は「ここでは展開されえない」(同前)と断りながら、競争と信用を「集中の最も強力な二つの横杆」(同前二〇七八ページ、[I] 6555ページ)と呼び、競争と信用が集中を促進する仕組みの簡潔な描写を与えています(同前、[I] 6541-6555ページ)。

とくに、次の文章は、信用制度についての「資本論」での最初の本格的な叙述として、注目に値します。マルクスは、第三部で信用論を詳しく展開する予定ですが、執筆の時期からいうと、蓄積論のなかのこの文章は、第三部よりもあとで書かれているわけで、その意味で、集中を推

より集中
銀行 信用経済

「(五) これは、本文ではありませんが、フランス語版のこの部分で、マルクスは「独自の資本主義的生産様式」について、次のような解説をおこなっています。マルクスは、ほかでは、この概念規定を明らかにする解説をいっさいおこなっていませんから、この解説は見落とすわけにゆかない貴重なものだと思います。」

「近代産業、すなわち社会的結合と技術的工場のこの総体 (Gesamtheit) —— われわれが独自の資本主義的生産様式または本来の資本主義的生産と名づけたもの」(資本論④一〇七五ページ以下、マルクスが、独自の資本主義的生産様式という用語の意味について、「社会的結合と技術的工場のこの総体」と、生産過程(あるいは労働過程)の技術的側面に重点をおいて解説していることは、注意すべき点です。

資本の集積とは、資本の蓄積と拡大再生産にもづく生産手段の集積です。その規模は、蓄積第二の新しい視点は、マルクスが、社会的生産力の発展を推進する要因として、資本の集積と集中を特別に重視し、この過程についての、おそらく「資本論」全巻でもっとも詳しい解説をおこなっていることです。

資本の集積とは、資本の蓄積と拡大再生産にもづく生産手段の集積です。その規模は、蓄積

5

産業 綿織物

部門	一八五一年	一八六一年	増減
農業	一八五一年	一八六一年	
羊毛織物業	一〇二、七四一	七九、二四二	▲二三、四九九
絹織物業	二二、一九四〇	一〇、一七七八	▲一、〇二六二
キャラク捺染業	一、二〇九八	一、二五五六	▲四五八
縁つき帽子製造業	一、五九九七	一、三三八一	▲二、四一六
麦わら帽・ボンネット			
製造業	二、〇三九三	一、八八七六	▲二、〇五二七
麦芽製造業	一、〇五六六	一、〇六七七	▲一一一
ろくそく製造業	四、九四九	四、六八八	▲二、六六一
くし製造業	二、〇三八	一、四七八	▲五、六〇〇
木挽き	三、〇五五二	三、一六四七	▲一、〇九五
釘製造業	二、六九四〇	二、二六三〇	▲四、三一〇
錫鉱山・銅鉱山	三、三三六〇	三、三〇四一	▲三、〇一九
綿糸業・紡績・織物業	三、七一一七	四、五五五五	▲八、四三八八
炭鉱	一、八三三九	二、四六六三	▲六、三二三四

産業の機械化による人口の増加が、人口の相対的流動的

このブルジョアの俗説に痛撃をくわえたのです。いまの文章につづく、マルクスの「人口論」批判をお聞きください。

「これこそが、資本主義的生産様式に固有な人口法則であって、実際に歴史上の特殊な生産様式は、いずれも、その特殊な、歴史的に妥当な人口法則をもっているのである。抽象的な人口法則というものは、人間が歴史的に介入しない限りにおいて、動植物にとつてのみ実在する」(同前)。

イギリスの労働統計は実証する

マルクスは、このことを事実をもって裏付けるために、この箇所「注」をつけて、イギリスの各産業部門の労働者数の増減を示しています(資本論④一〇八四一八五ページ、[I] 6599ページ)。当時の国勢調査からの数字で、一八五一年と一八六一年を比較したのですが、文章ではわかりにくいので、表にしてみました。

イギリスの労働者人口の変動を整理した表

8

この150年前 19世紀イギリスの貧困の要因

「資本主義的生産とともにつのまったく新たな力である信用制度が形成され、それが、最初には蓄積の控え目な助手としてひそかに忍び込み、社会の表面に大小の量で散在している貨幣資力を、目に見えない糸で個々の資本家または結合資本家の手にかき集めるが、やがて競争戦における「一つの新たな恐るべき武器」となって、ついには諸資本集中のための巨大な社会的機構に転化する」(同前二〇七八ページ、[I] 6555ページ)。

集積の結果にせよ、集中の結果にせよ、産業設備の規模が拡大することは、労働の結合をより高度な形態に発展させ、来るべき高度な社会形態のための物質的諸条件を進展させます。

「産業設備のいっそうの拡張が、多数の者の全体労働をいっそう包括的に組織し、全体労働の物質的原動力をいっそう広範に発展させるための、すなわちばらばらな、慣行的に運営されている生産過程を、社会的に結合され科学的に配置された生産過程にますます変換していくための、出発点をなす」(同前二〇八〇ページ、[I] 6566ページ)。

マルクスは、最後に、集積の進行の緩慢さにくらべて、集中の進行が急激なことを強調し、それが、「資本の技術的構成における変革」を促進すること、集中によって一夜のうちに鍛接された「資本塊」が「社会的蓄積の新たな強力な横杆」となることなど、集中の急速で大規模な進行が、社会的規模で資本の構成の変化に広範で重大な影響をおよぼすことに目をむけます(同前二〇八一ページ、[I] 6567ページ)。

「二方面では、蓄積の進行中に形成される追加資本は、その大きさに比べます少数の労働者を吸収する。他方では、新たな構成で周期的に再生産される旧資本は、従来それが就業させていた労働者をますます多く反発する」(同前二〇八一ページ、[I] 6577ページ)。

これで、ようやく論点は、「資本の増大が労働者階級の運命におよぼす影響を取り扱う」(同前二〇五三ページ、[I] 6400ページ)というこの章の本題にもどってきました。

第三節 相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産

6

国内総生産 (GDP)

1950年代: GDP +2.7倍
1960年代: GDP +170%
1960年代: GDP +163%
1960年代: GDP <2.6倍

この問題を考えるために、基礎になる統計資料を用意してみました。
この問題は、重要な問題ですが、第四節の労働者階級の貧困化問題を扱
うところであわせて検討することにし、ここでは、経済発展と労働者人口の関連を研究してきた
一つの応用問題として、戦後の日本における経済発展と雇用の問題を考えてみたい、と思いま
す。
急成長の時期の資本主義が労働者不足になやむという問題は、資本主義の幼年期の話でした
が、戦後の日本経済の連続的な急成長は、世界資本主義の歴史のなかでも特筆に値するものでし
た。その急成長に対応する労働者人口の増加が、なによりによって保障されたのか。これは、戦後日
本の経済発展の重要な問題の一つでした。急成長が必要とする雇用の拡大の規模は、通常の「産業予
備軍」でまかなえるようなものではなかったのです。
この問題を考えるために、基礎になる統計資料を用意してみました。
次の表は、日本の経済規模と労働者人口の推移をみたもので、朝鮮戦争の「特需」景気が日本
経済の転機となった一九五〇年を起点に、二〇〇〇年まで、十年ごとの数字をとっています。下
の欄に、国内総生産 (GDP)・現在の物価に換算を、上の欄に、労働者、農漁民、勤労市民の階
級・階層ごとの労働者人口を書きました。二番目の表は、労働者人口の構成比の推移および GDP
P と労働者人口の増加率を示したものです。

1851年~1861年を観察
結果

ここにあげられたものが、おそらく当時の主な産業部門だったのでしよう。農業を別にして十
三部門ありますが、そのうち、この時期に労働者が増えたのは、綿糸・紡績・織物業、炭鉱業な
ど七部門で減った人員の合計は一五万〇四三八八、労働者が減ったのは、梳毛織物業、絹織物業
さんでありますが、前回紹介した綿工業についてのマルクスの年表でも、五九一六一年は「一八五
九年には大繁栄。……一八六〇年はイギリス綿工業の絶頂。……一八六一年には高揚がしばらく
続く」(資本論④七八六ページ、(I) 418ページ)と記録された時期ですから、この十年間は、
全体としてイギリス工業の上向きの発展の時期でした。その時期でも、資本による労働者の吸引
は労働者の反発と結びついて進行したのです。マルクスは、キャラコ捺染業について、労働者数
の減少が「この事業の大拡張にもかかわらず」起こった現象であったことを指摘しています。
「事業の大拡張」が技術的な進歩と結びついていたのです。
つたりのにいうと、マルクスが、資本主義の生産様式の基本的な傾向を論じながら、その裏
付けとしてあげたのが、イギリス資本主義の十年間の発展の事実だというのは、印象的なこと
です。これは、偶然ではありません。当時の経済統計が貧弱だったことにももちろんありますが、そ
れ以上に重要なことは、マルクスが「資本論」を書いたのは、機械制大工業が現実支配的な地
位をしめ、資本主義が資本主義らしくなっている(独自の資本主義の生産様式)からせいぜい三十年
ないし四十年という時点です。恐慌にしても、最初の恐慌が一八二五年、「資本論」執筆までに

産業循環と「産業予備軍」

人口法則の問題にもどりますが、資本の蓄積とともにたえず過剰人口を生み出すという資本主
義的蓄積のこの特質は、実は、資本主義にとって、絶好の発展条件の一つをつくりだすのです。
マルクスの考察は、この問題に進みます。
この章のはじめに、資本主義の初期に、経済の拡大に労働者の供給が追いつかなかった時期が
あったことを話しました。資本主義が発展した段階でも、生産が急速に拡大する急成長の時期が
必ずあります。私たちは「機械と大工業」の章で、資本主義的生産の産業循環について見てき
ましたが、循環の起点に恐慌をおくと、それに続く時期——活況を経て繁栄にいたる時期は、全
体として急成長の時期にあたります。その時期は、当然、新たな労働力を必要とすることに
なり

戦後日本の高度成長と労働力問題

Table with 5 columns: Year, Laborer population, Workers, Agriculture/Fishing, Laboring citizens, and Total GDP. Data from 1950 to 2000.

Table with 6 columns: Year, Worker ratio, Agriculture/Fishing ratio, Laboring citizens ratio, GDP growth rate, Labor force growth rate, and Unemployed growth rate. Data from 1950 to 2000.

まず一九五〇年から八〇年までの三十年を見てください。国内総生産は、三十一兆八千億円か
ら三百七十七兆五千億円へと約十倍の増加です。経済の規模、生産の規模が十倍に拡大したの
です。この中心をのぞいたのが、鉱工業生産の急増であったことはいうまでもありません。
これにたいして、農漁民・勤労市民をよむ労働者人口の総数は三千六百三十一万人から五千
七百万人への増加で、五七％しか増えていません。十倍の生産にたいし、一・六倍の労働力と
いうことでした。生産力はもちろん増大していますが、労働者の増加が労働力全体の平均的な増加率である
一・六倍程度にとどまっていたら、とても経済規模の高度成長には対応できなかったでしょう。
実際、これに対応するために、労働者人口の構成に大変動が起きました。労働者数は、同じ期
間に、千三百八十九万人から三千八百一十二万人へと約三倍に増え、それによって十倍の経済成長が
ささげられたのです。
この労働者数の急増がどうして実現されたのか。年配の方はご記憶だと思いますが、戦後の日
本では、「労働力流動化政策」といって、農村にある労働力を都会に移動させることが、国の政
策とされました。これは、農業を高度化するためではありません。工業を中心にした経済の急成
長の条件づくりのために、この政策が意図的に強力に推進されたのです。
ですから、この期間に、労働者数が三倍になった反面、農漁民は千六百十九万人から五百五十
九万人へと三分の一に激減しました。農業人口が三十年という短期間にこれだけ減少したとい

産業予備軍
農民・勤労市民

ですが、初期の段階とは違って、発展した段階の資本主義は、労働者不足で悩む、ということ
はないのです。
それは、資本の蓄積のなかで、たえずはきだされる労働者が、「相対的過剰人口」——失業者
の「たまり場」をつくって、急成長の時期に必要な労働力も、そこからの供給でまかな
うことができるからです。マルクスは、その意味で、「相対的過剰人口」を「産業予備軍」とも
呼んでいます。職場から締め出されている労働者とその家族にとっては不幸なことです。資本
主義的生産様式にとっては、これほど都合のよい存在はないのです。
「過剰労働者人口が、蓄積の——または資本主義の基礎としての蓄積の——必然的な産物
である」とすれば、この過剰人口は逆に、資本主義的蓄積の種、いやそれどころか資本主義的
生産様式の実存条件となる。それは、あなたが資本が自分自身の費用によって飼育でもしたか
は、資本の変換する増殖欲求のために、現実的人口増加の制限にかかわらずいつでも使える
マルクスはここで、もう一度、資本主義のもとの産業循環の経路を描きだします。
「近代の産業の特徴的な生活行路——すなわち、比較的小さな変動によって中断されながら、
中位の活気、全力をあげての生産、恐慌、および停滞の諸期間からなる一〇カ年の循環という
形態」(同前二〇八八ページ、(I) 661ページ)。
生産規模の拡大と縮小の大幅で特質づけられるこの産業循環は、産業予備軍が存在しているお
かげで、「全力をあげての生産」の時期にも労働者不足になやむことなしに進行できます。また、
この産業循環のおかげで、産業予備軍はたえず「新兵」の補給を受け、いつでも動員可能な体制
を維持することができるのです。
産業循環は、「産業予備軍または過剰人口の不断の形成、大なり小なりの吸収、および再形
成に立脚する。産業循環の浮き沈みは、それがまた、過剰人口に新兵を補充し、そのもつとも
精神的な再生産動因の一つとなる」(同前)。
産業循環が産業予備軍によってささげられている仕組みを発見したことは、マルクスが展開し
た蓄積論のいちばん大事な点の一つです。
恐慌論をフランス語版で読むと……
ここまで論じたマルクスは、続く部分で、産業循環の問題にさらにたいた考察をくわえま
す。「機械と大工業」の章でも産業循環の運動が記述されましたが、今度は、産業の循環的な動
きに労働者の雇用問題の変動がくわえられ、全体として新鮮な叙述になっています。
マルクスが、フランス語版を刊行したときに、蓄積論の部分を大幅に書き直したことは、すで
に説明しました。この産業循環と恐慌の叙述も、いちばん手を入れた部分の一つでした。エン
ゲルスは、第三版の編集のさい、重要と思うところは取り入れたのですが、恐慌論の部分には、

「最後に、相対的過剰人口または産業予備軍を蓄積の範囲と活力とに絶えず均衡させる法則は、ヘンライストの模範プロメテウスを岩に縛りつけたよりもいっそう固く、労働者を資本に縛りつける」(同前)。

この当時も、もちろん、好況と恐慌・不況の交替という産業循環の波は存在しました。しかし、全体として経済規模が急成長するなかでの恐慌・不況ですから、不況の時期にも、資本は、次の好況に備えての労働者の確保を重視したものです。景気の悪い時期に、労働者に草取りをさせてでも雇用の基本を維持することがやられたのは、労働者の抵抗ももちろんありましたが、大きな背景として、こういう事情もありました。

第四節 相対的過剰人口のさまざまな実存形態。資本主義的蓄積の一般的法則

第四節の前半は、産業予備軍は、どんな形態で存在しているか、という問題です。マルクスは、「(一)流動的過剰人口。経済の循環的な運動や、労働者自身の年齢的な事情などで、」ときには「(二)潜在的過剰人口。農村で就業の機会を待っている労働者たちです。」

「この法則は、資本の蓄積が、産業予備軍を増大させ、それがまた受給貧民の層を大きくすることが指摘され、」これこそが資本主義的蓄積の絶対的、一般的法則である。『資本論』④「一〇七ページ」(「一」674ページ)と説明されます。

15

日本の現代にはおいらはどこのおいらか? 地方と中央は収奪した 地方は外国か?

「プロメテウスは、建築師で鍛冶屋で鐘師で二輪車製造者、要するに神の国におけるあらゆる仕事の技師だと紹介されています。さらにゼウスは、縛られたプロメテウスを虎に襲わせ、その肝臓を食べさせます。肝臓は食われるとすぐあとから新しく出てくるので、その責め苦はいつまでも続くというしかけです。プロメテウスがゼウスに服従する気になれば、それは終わるのですが、プロメテウスは、服従を拒みます。」

地方⇔中央 農村⇔都市 相対的貧困化 一方が豊かになると他は豊かにならな

「この法則は、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。したがって、一方の極における富の蓄積は、同時に、その対極における、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化、および道徳的墮落の蓄積である」(同前)。

16

「(四) 受給貧民。まだ社会保障制度が存在しない社会状態でしたから、救済法など、公的・私的の慈善事業的な援助で生活している貧民層です。マルクスは、この層を「相対的過剰人口の最深の沈殿物」(同前「一〇五ページ」(「一」673ページ)と呼んで「三」の形態」を説明したあと、事実上の第四の形態としてあげています。

「この予備軍隊列がその競争によって就業者に加える圧迫の増加は、就業者に過度労働と資本の命令への服従を強制する。労働者階級の一部分の過度労働による、他の部分の強制的怠惰(失業のこと)「不破」への突き落とし、およびその逆のことは、個々の資本家の致富手段となる」(「資本論」④「一〇九三〜一〇九四ページ」(「一」665ページ)。

14